

平成 21 年 1 月

吾に食ってかかる子猫の目のつぶら  
愛は奪ふべしを地でゆく恋の猫  
青き踏みうさぎの糞を踏むことに  
青空の底を焦がして曼殊沙華  
仰向けの背中が痛い翳雲  
空缶に蹴られるさだめ冬紅葉  
秋の世に竹の春てふ天邪鬼  
朝寝てふことばにどこか贅沢感  
汗のわけはハンカチだけが知ってゐる  
渾名は空つ風本名は北風で  
熱々の飯煮凝の天敵は  
熱爛のゆびに耳たぶ抓まれる  
雨雲の在庫がなくて空梅雨に  
雨粒の重くてならぬ花董  
天の川につらなり諍ひ絶えぬ星  
あまりものこぼすかに降る春の雪  
雨の予報が主たる業務の雨蛙  
洗ふ手の手袋ゆびを啜へらる

蟻と蟻内緒話のごつつんこ

アルミサッシずらして隙間風体験

一年の起とも結とも竹の秋

一枚は議論の好きな花筵

一山のトッランナの初紅葉

一匹のゴキブリ進退を悩みある

一匹の離脱もなくて翳雲

意図的に遅々と萩寺の歩行

井戸水の嗽ごぼごぼさはやかに

稻妻のぎざぎざ天と地をつなぐ

いぬにしとかけられてあるいぬふぐり

芋煮会芋煮の芋が季語の芋